

オバマ大統領誕生で幕を開ける 真のグローバル社会



(社)関西経済同友会 代表幹事

齊藤 紀彦

去る1月20日、バラク・オバマ氏が米国第44代大統領に就任した。アフリカにルーツを持ち、アジアで幼少期を過ごしたオバマ氏は、これまでのどの米国大統領よりも多様性や変革のポテンシャルを感じさせる存在であり、その就任式は世界が今大きく変わりつつあることを実感させるものだった。

振り返ってみると1990年代から20年、われわれ人類は、世界を広範なネットワークで結びつけることに邁進し、あらゆる国の製品や資金を使い、情報を瞬時に手に入れることで豊かさを享受してきた。しかしながら一方では、そうした中で見逃されがちな各国の文化や社会システムの独自性が場合によっては「悪しきもの」と決めつけられてしまうことで、民族や宗教間をめぐる対立の激化や、国家間・国家内の格差拡大、企業のモラルハザードといった大きな問題を引き起こしたことも厳然たる事実である。

その点で今求められているのは、各国・地域が昔に戻って固有の文化や社会システムに閉じこもるのではなく、世界中の国々や人々が互いに認め合い、心と心で交流しあう「真のグローバル社会」を築き上げることではないだろうか。米国民のみならず世界中の人々が熱狂とともにオバマ新大統領を迎えたのは、その中核に「多様性」と「相互理解」を持つと思われる彼にこそ次の「真のグローバル化」の時代を引っ張ってほしいという期待の顕れではないかと思う。

そして、この「真のグローバル化」の時代

においては、われわれ関西にも大きな役割が求められている。関西は、古くからアジアを中心とする各国との外交・文化交流の場として多様性を重んじてきた地域であり、多彩な人々や知恵、文化を受け入れて日本固有のものとの融合させ、わが国各地に発信してきた。また近年でも科学技術やものづくり、サービス分野においてアジア市場との結びつきが強く、今後重要度を増す低炭素化技術でも世界最先端のイノベーションパワーを持っている。そうした関西がアジアをはじめとする世界とわが国のゲートウェイとしてしっかり機能することで、相互にわかりあい、ともに発展する「真のグローバル化」を大きく推し進めることができるはずである。

その「世界へのゲートウェイ」関西にとって、最も重要な拠点がわが国唯一の完全24時間空港である関西国際空港であることは言うまでもない。関空は、人やモノの結節点であることはもちろん、文化や心の結節点として、世界と関西、わが国をしっかりと結んでいく重大な責務がある。

未曾有の経済危機の最中で航空需要が落ち込み、厳しい時期が続くが、こういう時こそ二期事業、関空と関西各地の各種ネットワーク整備など関空の機能強化に関西一丸となって全力で取り組まなければならない。関西経済同友会としても、利用促進やプロモーション、関係箇所への働きかけなど、あらゆる形で協力していく所存であり、関空が次の時代の「真のグローバル化」の担い手として飛躍することを強く期待している。